

Peter Eli Gordon, *Rosenzweig and Heidegger, Between
Judaism and German Philosophy*,

University of California Press, 2003, xxix, 328 p. \$65.00

丸山 空大

本書は、レヴィナスやデリダによる言及をとおして、近年日本でもその名を聞くことのおおくなった、フランツ・ローゼンツヴァイクに関する最も新しい研究書のひとつである。著者のピーター・エリ・ゴードンは、ハーバード大学の歴史学の助教授で、専門はワイマール共和政下のドイツ、ドイツ観念論、現象学などであるという。本書も、1920年代にドイツで活躍した二人の思想家について、思想史の立場から書かれた比較思想研究の著作であると、ひとまずは言うことができるだろう。著者が比較的若手の研究者であり、本書がはじめての著作であることを指摘した上で、まずは本書を取り上げる意義について簡単に述べたい。

フランツ・ローゼンツヴァイク (1886~1929) はドイツのユダヤ人思想家で、その主著“*Der Stern der Erlösung*” (『贖いの星』) は1921年に出版された。その思想は、彼の死後、長いあいだかえりみられることはなかったが、近年、レヴィナスらにより再発見され、「近代ユダヤ思想 *une pensée juive moderne*」という文脈で登場するようになった。このため、彼の思想は多くの場合ユダヤのかつ倫理的なものとして理解される。本書の目的は、簡単に言うなら、この「近代ユダヤ思想」という文脈からローゼンツヴァイクの思想を切り離すことにある。確かに、彼の思想には先述のような側面もあるのだが、彼の本来の意図はより総合的で包括的な「哲学の体系」を述べることにあった。著者は、ローゼンツヴァイクの思想を、宗教思想、宗教哲学、神学としてではなく、一般的な哲学として解釈しようと試みる。

本書をつらぬくこの目的は、積極的に評価されなければならない。というのも、レヴィナスら、ユダヤ人思想家による「現代ユダヤ思想」という文脈からの解釈は、現在に至るまで非常に豊富な議論を産みだし続けてはいるのだが、そこでは、ローゼンツヴァイクの思想はひとつのインスピレーションの源として囲い込まれてしまうからだ。いわばその文脈の中では、ある伝統における正典のような地位に祀り上げられてしまうわけで、あらゆる種類の曲解、歪曲も可能な解釈として許容されてしまう。そうすると、一方では、正典に絶対的な権威が賦与されることで、内容に関する批判的な討議が行われにくくなり、また他方では、そうでなくとも我々「異教徒」にとって接近が困難であるローゼンツヴァイクの思想が、我々に対して完全に閉じたものとして現れてしまうのだ。確かに、ローゼンツヴァイクの思想に接近し、正面から取り組んだ末に、それが我々の理解を決定的に拒むものとしてしかあらわれ得ない、という結論にいたる可能性はあるだろう。しかし、それが、ある伝統の担い手を自称するサークルのうちに正典として囲い込まれてしまつては、我々にはこの最初の接近すら不可能なものに思われてしまうのだ。

ローゼンツヴァイクの思想が、以上のような特殊な研究史を持つことから、本書の企図の重要

性が理解されるであろう。さて、本書はその大胆な企てを成功に導くために、いくつかの場面で、立論における強引さや、議論の不十分さを意図的に看過しているように思われる。これらのことを踏まえた上で、以下、本書の内容を概観し、しかる後に簡単な評を試みたい。本書の構成は次のとおりである。

導入：ドイツ人、ユダヤ人そしてワイマール哲学という変容

第一章．形而上学に向かって：コーヘンの『遺著』と新しい思考の起源

第二章．ヘーゲルの運命：ローゼンツヴァイクの『ヘーゲルと国家』における有限性の出現

第三章．形而上学を越えて：ローゼンツヴァイクの『〔贖いの〕星』Part I

第四章．世界—内—救済 (Redemption-in-the-World)：ローゼンツヴァイクの『〔贖いの〕星』Part II

第五章．「深い森に面して」：ドイツ語の地平におけるヘブライ語聖書

第六章．「精神史におけるアイロニー」：ローゼンツヴァイク、ハイデッガーそしてダヴォス論争

結論：ドイツ人、ユダヤ人そして解釈の政治学

「導入」では、先に述べた研究史の問題点が指摘され、本書がとる方法論が示される。論はまず、『贖いの星』が、出版当時は、必ずしもユダヤ教の書物として読まれたわけではなく、一般的な哲学（例えば、当時ヨーロッパで生まれつつあった実存主義哲学）としても理解されていたという事実を指摘した上で、第二次世界大戦後のローゼンツヴァイク解釈に対し批判を加えてゆく。特に、レヴィナスとの親近性を指摘するような解釈については、第一にそれが、あたかも外部と関係をもつことなく純粋に維持されてきた「手付かずのユダヤ哲学の伝統」なるものが実在するかのようになしている点、第二にローゼンツヴァイクの思想を当時のドイツの哲学との関係や時代状況から完全に切り離してしまっている点について批判を加えている。また、解釈の内容に関しても、レヴィナスの倫理哲学があらゆる全体性を拒否して、他者との差異や他者への責任を際立たせることの上に成り立っているのに対し、ローゼンツヴァイクの思想がその要の部分において全体論的であることを指摘する。このことは、第四章で『贖いの星』が読解される際に詳論される。

これらの指摘から、現代一般化している解釈にとらわれずに、ローゼンツヴァイクの思想を同時代の思想や先行する思想との関係から理解することの正当性を引き出した上で、著者はローゼンツヴァイクの思想をハイデッガーのそれとともに「ワイマール哲学」として思想史の上に定位する。著者は、ワイマール哲学を、「有限性」、「孤立（孤独 isolation）」「科学、観念論、批判といった従来諸価値」への反抗、「古の正典に新たな仕方でも語らせる」といった特徴を持つものと規定し、ローゼンツヴァイクとハイデッガーの両者がこれらの特徴を備えていることを指摘する。こうして、「導入」において、ローゼンツヴァイクの思想は1920年代のドイツ哲学の一派として位置づけられる。

第一章では、ヘルマン・コーヘン（1842～1918）の思想を概略した後、彼の晩年の思想と、それまでに彼が築いてきた哲学体系との間に不整合が見られることを指摘しつつ、そこにあらわれた不整合に、ローゼンツヴァイクが自らの唱える「新しい思考 Das neue Denken」の兆しを見て

いるということが述べられる。新カント派を代表するコーヘンの思想は、非常に極端な観念論として評価されることが多い。しかしコーヘンは、自らの死後出版された著作『ユダヤ教という源泉からの理性の宗教』において、自身の哲学体系のうちに「宗教」をうまく取り込むことが出来なかったということを露呈しているかのように見える。というのは、そこでは、普遍的な倫理的人間と、宗教の担い手たる特殊な個人との折り合いがつかなくなってしまうのだ。ローゼンツヴァイクはこの事態を、観念論的な体系が内部から崩壊し、新たに完全に特殊な個人として人間をとらえようとする哲学が生まれる瞬間だととらえる。ここにみられる、晩年のコーヘンが自らの哲学体系に不満を感じて、そこからの転換を図ったという解釈は、当時、決して一般的ではなかったのだが、ローゼンツヴァイクはコーヘンをこのように自らの思想へとひきつけて解釈したのだった。本章は概して思想史的な記述に終始するのだが、この論述の過程で著者が、コーヘンとローゼンツヴァイクの思想の間に、「選民」概念の解釈としてのユダヤ人の存在論的独立性や、離散の必然性という重要な共通点が見られることを指摘し、コーヘンからローゼンツヴァイクへの影響関係を示唆している点は注目に値する。

第二章は、ローゼンツヴァイクの『ヘーゲルと国家』という著作を取り上げ、後の『贖いの星』との連関や、彼の思想へのヘーゲルの影響を考察する。『ヘーゲルと国家』は、1913年に博士論文として書かれ、1920年に新たに序文が付されて出版された著作である。この作品は、従来のローゼンツヴァイク研究では大きく取り上げられてこなかった。このことは1976年に刊行が始まった著作集に（書簡や日記まで網羅されている大規模なもの）、この作品が含まれていないことからあきらかだ。このあからさまな軽視あるいは無視は、その根拠をローゼンツヴァイク自身の言葉のうちに持っている。彼は、この著作の序文で、「この本を、私はもはや今日では書くことが出来なかったであろうし、実際にほとんど訂正することすら出来なかった。いまはただ、この本を、それがかつてあったそのまま出版すること、すなわち当初のもくろみどおりに、1919年の「精神」としてではなく、戦前の精神の目撃者として出版することだけがのこされている」と述べ、この過去の著作と出版当時の彼の思想との間に大きな隔たりがあることを認めているのだ。そして、このことを裏付けるかのように、その翌年に出版された『贖いの星』の内容は、「イオニア〔パルメニデス〕からイエナ〔ヘーゲル〕まで」の西洋哲学の伝統をことごとく批判するという内容を含むものであった。これらのことから、この初期のヘーゲル研究と、『贖いの星』や『新しい思考（1925）』に見られる成熟期の「新しい思考」とのあいだには関連がない、あるいは、関係があったとしても前者が後者の批判の対象となるという否定的な関係があるにすぎない、とするの見方が一般的となっていたのだ。

これに対して本書は、初期ヘーゲルにおけるイエスのイメージが、ユダヤ人（民族 Volk）の存在論的な特殊性という理論（この理論はローゼンツヴァイクの考える「贖い」において中心的な役割を果たすことになる）のモデルとなっていることを主張する。このイメージとは、自らの信仰のため、運命と鋭く対立するイエスというものだ。ローゼンツヴァイクのヘーゲル解釈によれば、そのような運命とはまさに国家であり、また、そのような対立の解消、すなわち救済は、ヘーゲルにおいて、個人が国家をより高次の生の舞台として認識することにより、個人を国家という全体性のうちに解消することによってなされるという（この解釈はそれ自体、初期ヘーゲルのキリスト教に関する思索が、直接、後の国家哲学へと発展したと見る点において斬新であっ

た)。ローゼンツヴァイクは後の『贖いの星』の中で、ヘーゲル流の国家による救済という考え方は退けるものの、このイエスのモデルを、ユダヤ人（民族 Volk）の選びと離散を表現するときに取り入れた。すなわち、第一次世界大戦の後、国家と結びついた民族主義に絶望したローゼンツヴァイクは、国家をもたない民族、即ち、永遠に故国を追放されたユダヤ人に救済の徴を見るにいたったのである。ここに見られるローゼンツヴァイクの態度を著者は「国家主義なき民族主義 Nationalism without Statism」と表現する。

第三章と第四章では、これまでの二章の内容をあとづけるように、『贖いの星』のテキストの読解が行われる。まず、『贖いの星』のスタイル、構成、方法について述べた後、全体的な内容の概略が述べられる。つづいて、『贖いの星』のひとつの鍵概念「贖い」（Erlösung、本書では redemption）の意味を解明し、それとハイデッガーの「本来性」の概念との類似を指摘したうえで、両者の特徴を「世界-内-救済（贖い） Redemption-in-the-World」と名づける。具体的には、ハイデッガーの『存在と時間』における思想の基盤が初期のキリスト教研究にあることを示唆し、彼の「本来性」という概念がローゼンツヴァイクの「贖い」と同じように、彼岸ではなくこの世界の中での救いを意味するということが主張される。

ローゼンツヴァイクにおいて「贖い」は、「創造」、「啓示」とともに、「世界」、「神」、「人間」というそれぞれ存在論的に独立した三つの実体性のあいだのある種の関係性を表現する概念であった。「贖い」とは、人間にとっては「生」の中に「永遠」が引き入れられることであり、それは、「贖い」が永遠に「到来しつつある」瞬間として人間に対してあらわれることにより実現する。著者はこの点から、「贖い」は人間にとって未来へと方向付けられた現在として現れると解釈する（ここで同様に「創造」という過去も、現在を意味づけるものとして、現在という生の地平から解釈され、これらの『贖いの星』における時間理解がハイデッガーにおける「時間性」と比較される）。ところで、こうして地上に「永遠」が引き入れられるためには、共同体がそれに先行して存在していなければならない。著者は、この共同体が個人同士の対話的な結びつきからなるものではなく、無根拠な決断によって「我々」を他から切り離すことで成立するような共同体であるといい、それは端的にユダヤ人のことのみを指すと解釈する。こうして、ローゼンツヴァイクの「贖い」概念は、ユダヤ教という共同体のみで実現される、人間の特殊な時間性の経験として解釈され、彼の思想の持つ全体論的、共同体論、民族主義的側面が描かれる。

第五章は、ローゼンツヴァイクがマルチン・ブーパーとともにおこなった旧約聖書のドイツ語訳を、『贖いの星』以降の哲学的著作としてとらえ、そこに見られるローゼンツヴァイクの哲学的意図を解明することに向けられる。このドイツ語訳は、洗練を嫌った荒々しい文体と翻訳に際する独特の解釈を特徴とし、そこには「古の正典に新たな仕方でも語らせる」という彼らの哲学の特徴がはっきりとあらわれている（とくに出エジプト記 3 章 14 節の「神の名」の翻訳の独自性が指摘されている）。ローゼンツヴァイクは『贖いの星』を発表した後、数本の短い論文やエッセイをのぞいて、ほとんど哲学的内容の著作を残さなかったのだが、彼は表現の方法を変えて自らの哲学的思想を発表し続けていたのだ。

第六章では、ダヴォスにおけるハイデッガーとカッシーラーの論争に対するローゼンツヴァイクのコメントが分析され、彼のハイデッガーへの言及の真意が探られる。この最晩年に書かれた短いコメントの中で、ローゼンツヴァイクは、ハイデッガーを「新しい思考」の代表としてとら

え、また、カッシーラーを「古い思考」の代表としてとらえている。そして、ハイデッガーと晩年のコーヘンの宗教思想との間のつながりを指摘することにより、自らの立場とハイデッガーの立場との間に親近性を見出している。実際には、ハイデッガーはコーヘンら新カント派に対して批判的であり続けたわけで、この解釈の正当性は疑わしい。しかし、ローゼンツヴァイクの生前からすでに、彼の思想が、彼が望むように「哲学の体系」として理解されることは稀であった、ということをもふまえるとき、この最晩年の強引なハイデッガー解釈は、同様に多くの困難をはらむローゼンツヴァイクのコーヘン解釈とあわせて、ローゼンツヴァイクを思想史の中に正当に位置づける際の重要な手がかりとなるであろう、と著者は述べる。

そして最後に結論で、これまでのローゼンツヴァイク解釈やハイデッガー解釈のもつ政治性が批判される一方で、本書の解釈が非政治的であることが主張されて本書は終わる。

以上のように本書の内容は多岐にわたるが、その成果は主に第二章にあるといってよい。この第二章は、ある思想家を同時代の他の思想家や、過去の思想との影響関係において説明しようとする研究にありがちな失敗をのがれているといってよい。すなわち、この種の研究では、あたかもその思想がそれらの影響のつぎはぎにすぎないかのような結論に到達し、その思想家の独創性やその思想家を研究対象として取り上げる意義を見失うということがしばしば起こるのだが、本章の場合、ある方向に傾斜したローゼンツヴァイク研究史の転覆というはっきりとした意図に貫かれているため、このような過誤をのがれているのだ。このような意図に導かれたものとして、本章はローゼンツヴァイクの思想の研究史と内容理解の両面から大きな寄与を果たす。まず研究史に関して、これまで取り上げられることの少なかった『ヘーゲルと国家』という初期の著作が、彼の思想の発展段階の中に確固とした位置を得た点において非常に重要である。また内容面では、ディルタイの影響が『ヘーゲルと国家』におけるヘーゲル思想のとらえ方から、『贖いの星』における「生」の概念まで一貫して見られることを指摘する点や、初期のヘーゲルにみられるイエス、キリスト教、運命についてのイメージが、『贖いの星』において重要な柱となる「贖い」におけるユダヤ人のイメージへと引き継がれていることを指摘する点において非常に意義深いといえる。

そもそも、この浩瀚な『ヘーゲルと国家』という書物の基本的な議論の流れは、ローゼンツヴァイクの指導教官であったマイネッケのヘーゲル理解に沿ったものである。そしてそこでの主な議論は、ヘーゲルの国家論はいまだ個人の意思が国家に解消されるという構図にとどまり、メター個人としての民族をとらえることができておらず、従って、いまだ啓蒙主義のコスモポリタニズムに縛られたものであり、実際の歴史において民族のはたす役割、即ちナショナリズムの意義をとらえきれていない、とするものであった。そこから、本書で示されるような議論を明確な形で取り出す手際は鮮やかであり（それゆえ論争を引き起こすであろうが）、今後の研究はおそらくここに示された理解を無視することは出来ないであろう。

また、もうひとつ本書の成果として付け加えたいのが、第四章のなかで示される、ローゼンツヴァイクのいう「血の共同体」の象徴的な解釈である。著者はこれを人種としてのユダヤ人や、実際に存在する民族としてのユダヤ人とする解釈を退け、「血」がユダヤ人に固有に受け継がれる独特の時間性であると解釈する。ここで「血」が象徴するものは、他に依存しない独自の伝統と時間性の流動性であり、決して人種的、民族的なものではないとする。この「血の共同体」は、特に我々「異教徒」がローゼンツヴァイクを読む際に、おそらく一番の躓きとなる困難な概念で

あり、評者には、ここに示された解釈は決定的であるように思われる。

しかしながら、本書のもう一つの大きな柱である（上記の梗概においては意識的にあまりふれなかったのだが）、ローゼンツヴァイクとハイデッガーとの比較研究については、その意図、成果ともに疑問を感じざるをえない。確かに、本書で指摘されるように、ハイデッガーとローゼンツヴァイクの思想の間にはいくつかの共通点が存在する。むしろ、ともに分析が「死」から始まる点、不安や孤独がそこにおいて重要な契機となる点、ともに以前の哲学史を否定する点など、共通点を見出すことは容易ともいえるかもしれない。しかしこのときに、ハイデッガーほどその評価が様々な方向に振れ、その思想の解釈の方法や内容がゆれている思想家はいないという事実を忘れるべきではない。本書は目次からも分かるようにそのほとんどの分析がローゼンツヴァイクに割かれる。一方で、折にふれて「ハイデッガーの思想」として登場するのは、どこのものとも知れない通俗的な解釈か、単に語彙や表現共通点が見られる箇所からの断片的な引用である。著者は、ハイデッガーについても、その政治的な振る舞いのみから、その哲学についても「悪」と断罪する近年の研究の動向を批判するが、著者が本書の中で利用している解釈の一部は恐らくこの解釈の流れを汲むものである。ハイデッガーの研究史と、そこに見られる政治的な駆け引きの複雑さは、ローゼンツヴァイクの比ではなく、もしも、この二人の思想家の間に、皮相的な語彙の一致以上の関係を見出そうとするのであれば、ハイデッガーについて、ローゼンツヴァイクについてなされるより以上に徹底的に、研究史の整理やそのなかにおける著者の解釈の位置づけが示されなければならなかったはずだ。

このほかにも、『贖いの星』の核心である「啓示」の概念に注意が払われないため、著者の言う共同体の先行性という主張に説得力が乏しいことなど、いくつかの問題点を挙げることは出来る。しかし、それにもかかわらず、本書がローゼンツヴァイクを一般的な思想研究の地平へと解き放った意義はおおきい。特に、ユダヤ人でもなくキリスト教徒でもない「異教徒」として一従って、彼の描く体系の中に果たして自らの居場所があるのかを絶えず不安に感じながらローゼンツヴァイクに接近しようとする我々にとって、本書のもつ価値ははかりしれない。